

[ブーケ]

bouquet



重要無形文化財「白磁」保持者(人間国宝)

井上萬二 Manji Inoue

有田焼の巨匠が語る

400年もの伝統を誇る有田焼の世界で長年創作を続けていらっしゃる井上萬二先生。

人間国宝に認定された「白磁」の技は、加飾を施さず、完璧な形で“究極の美”を追求するというもの。ご自身の歩みを振り返りながら、美しさの定義、作品を生み出すために必要なこと、日米で多くの若者を指導されてきた教育者としてのお考えなど、さまざまに語っていただきました。

パイロット志願から陶芸の道へ

bouquet【ブーケ】編集部（以下、b）：萬二先生は有田町にお生まれになり、焼き物が身近にある環境だったかと思いますが、本格的に陶芸の道へ進まれた経緯について教えてください。

井上萬二（以下、萬二）：私の生家是有田焼を製作していた町工場だったんです。「井上製陶所」といって、職人が20〜30人働いていました。子どもの頃、窯に火が入ったら暖かいから、冬の寒い日なんかはずっと暖まっていた学校に遅刻しそうになり、職人さんが自転車ですべてくれたという思い出もあります。そんな焼き物が身近な環境の中で育ちましたけれど、「よし、将来は焼き物をやろう」という夢は抱けなかったんですね。

b：それはなぜでしょうか？

萬二：私の少年時代というのは、太平洋戦争のいちばん厳しいときでした。だから私たちの世代は、将来は軍人になることが夢だったんですね。女学校でも鉛筆をハンマーに持ち替えて、軍需工場では飛行機や弾丸などを製造していた時代です。私はパイロットになるための海軍飛行予科練習生となり、15歳から2年間、過酷な訓練で強靱な精神力をたたき込まれました。訓練と同時に、学科も毎日あり、勉強ばかりしていました。

b：学科というのは、どんな勉強だったのですか？

萬二：文法、作文、幾何、三角関数、物理……毎日勉強なんです。例えば、自分の飛行機は時速500kmで飛び、敵の軍艦は40ノット*で海上を走っている。そこで三角関数の計算をして、何度かの角度で降下して爆弾を落としたり敵艦に当たるか、ということをお求めなくてはならない。パイロットになるには計算ができないといけないんです。そういう教育を受けましたけれど、「雛鷺（飛び立つ前の鷺）」で終わりました。もうしばらく戦

争が続いていたら、我々はこの世に生がなかったかもしれませんね。

b：厳しい時代を経験されたのですね。戦争が終わり、地元の有田に戻られてからは、どのような日々を送られたのでしょうか？

萬二：終戦によって家に戻ると、親が「これから平和になるから焼くのを継いでくれ」と。けれども、窯元の親方になりたいとは思いませんでした。自分で作品をつくり求めていきたいということで修練に入ったんです。修練というのは弟子入りすることですね。親には「せっかく修行するなら無給で勉強しなさい」と言われました。給与を受けたら対価として働かなくてはいいけないでしょう。給与をいただかなかったら自分の勉強ができるということです。

b：この修練の時代が先生の土台となっているのですね。

萬二：終戦後というのは、生活的な環境は悪かったんですけど、幸いにして修行するにはよい環境の時代でした。なぜならば、周囲に「遊の世界」がないでしょう、遊ぶ環境が。それでも、いくら働いても食べるだけで精いっぱい時代に無給で働くというのは、よほどの気持ちがないとできません。7年間、無給でひたすら「作る技法」に専念しました。

b：ものづくりの世界は、学校のように一から教えてもらえるわけではないと聞きますが、先生はどのように技を学ばれたのですか？

萬二：昔の職人氣質というのは、せっかく自分の蓄えた技術をタダで教えるということはありません。技は教えるものじゃない。その人の弟子だったらともかく、企業の中で働いていたら各自のノルマもあるわけで、自分の手を休めてまで後輩に教えるということは自分の給料が落ちると

*船舶や航空機の速度を表す単位。1時間に1海里（1.852km）進む速さ。



ということです。だから昼間は、周りの先輩たちがどういう作り方をしていたか脳裏に刻んで、皆が夕方5時に退社したあとに一人残って修練を積んだのです。

b: 修練の期間につらいことや苦しいことはありましたか？

萬二: 修行には年限がないでしょう。いつまで勉強したらいいのかという壁にぶち当たって、もう辞めようかとも思ったんです。そのときに名工と出会いました。(初代)奥川忠右衛門さんという、有田焼の卓越した技術の保持者でした。他の追隨を許さない神業的な技をもっておられ、「よし、どうせ辞めるならこの人に近づいてからにしよう」と思いました。夕方や土日にお宅へ行って、特殊な技法を習い、ひたすらに修練を重ねたんです。ただ努力を重ねるだけではなく、「この名工に近づきたい」という明確な目標をもっていたから、寸暇を惜しんで勉強しました。やはり人との出会いというのが大切ですね。

b: 何事においても明確な目標や目指すイメージをもつことが大事だと、あらためて感じさせられました。

萬二: 無給の期間も合わせて13年間修行したあと、「技においてはあの人にお願ひすればいいぞ」という一定の域に達し、ご飯を食べていくには困らないようになりました。しかし、次は「技だけでなく焼き物の総合的な勉強をしたい」と思うようになり、佐賀県の窯業試験場(現・佐賀県窯業技術センター)に入ったんです。ここは県の機関で、自分の会得したものを業界に指導する場所ですから、ひたすら勉強しなくてははいけません。窯業試験場で同じく13年間勤めて、トータル26年してから、

やっと自分の道を開いたわけです。

後進の育成——単身アメリカへ

b: 教育者としても多くの後進を育ててこられたと伺いました。

萬二: 昭和30年代の後半から、有田でも技術者の高齢化が進み、そろそろ後継者を育成していけないといけな状態になったんです。「じゃあ、僕が後継者育成をやろう」と言いだして、毎年希望者を全国から募集して、30数年間、人数で言えば500名ぐらいの若者たちの育成に携わりました。人に教えるというのは、自分に10の力があつたら8ぐらいの教育しかできないんですよ。だから10の教育をしようと思ったら自分には10以上の力が必要なんです。簡単なことではありませんね。でも、人に教える環境というのは自分の人生にとっても、よい勉強になります。若い人たちの人間性の中に溶け込んで、自分自身も成長することができるし、そういうことができたのは人生のうちの幸いだっただと思っています。

b: アメリカの大学でも多くの学生を教えてこられたそうですね。

萬二: 今から約50年前の昭和44年に、アメリカのペンシルベニア州立大学から日本の伝統工芸について教えに来てほしいという依頼があつたんです。期間は半年間で、美術学部の学生たちに磁器の指導をするという内容でした。そのときは39歳、結婚して子どももいましたが、単身でアメリカに渡りました。それと、「通訳がいらないから英語は話せるようにしてきてくれ」という条件付きです。「よし、行こう」と決意したけれど、ハンデは一つ、言葉ですよね。



普通の人が
人並み以上に努力すれば、
必ず大成するということです。

b: 通訳なしで講義をするというのは、とても大変なことだと思います。

萬二: これも、やはり人間は運なんでしょうね。戦中は米英思想反対で学校でも英語を習わない時代でしけれど、海軍のパイロットだけは英語を教わることができたのです。私は運よく海軍飛行予科練習生になって英語を習った基礎がありました。だから文法は大丈夫だったんです。渡米するまで3か月間の猶予があったから、1日に5個ずつ単語を覚えることにしました。5個ずつでも、90日間で450個の単語を覚えられますでしょう？

b: かなりの数を覚えられますね。予科練で学んだことが形を変えて後の人生につながるとは、不思議な巡り合わせを感じます。

萬二: その当時はアメリカ本土までの直行便がなかった時代ですから、ハワイまで行って、ハワイからロサンゼルス、ロサンゼルスからシカゴ、シカゴからピッツバーグへ飛んで、ピッツバーグから大学まで、バッグを提げて一人でたどり着いたわけです。その当時、アメリカに行くだけでも難しいときに、よくやったなあと思います。

b: アメリカには陶芸の文化があったのでしょうか？

萬二: もともとアメリカには日本のような焼き物の文化はなかったのですが、戦後、イギリス人のバーナード・リーチさんと益子焼の人間国宝だった濱田庄司さんが、アメリカに渡って陶芸の世界を開いたんです。各地の大学で陶器についての教育が行われ、当時、アメリカの人々は日本の焼き物のことを「ミンゲイ（民藝）」と呼んでいました。

そのような中、ペンシルベニア州立大学だけは陶器ではなく磁器を学びたいと。磁器といえば有田焼ということで私に要請がきたのです。

b: アメリカに渡られたことが、先生にとっても一つの転機となったのですね。

萬二: ペンシルベニア州立大学での任期が終わったあとも、30回ほどアメリカに行き、学生を指導したり、日本の磁器について紹介する活動を行ったりしてきました。だから、半分はアメリカの感覚も持っているんです。最近は滞在期間が短くなりましたけれどね。昨年一人でニューヨークに行ってきましたよ。日本の心をもっているけれど、異国のよい文化ももっているから、作品づくりにおける感性にもそれが表れてくるように思います。何かを創造するときには、こうしたインスピレーションが大事です。

常に挑戦を続けて

b: 先生は常に作品をつくり続けていると伺いました。

萬二: アメリカでの指導と並行して、銀座の和光で毎年6月に個展を行っています。昨年までで43回、今年は44回目の個展です。ひたすらに1年も欠かさず個展を行うのは至難の業なんです。

b: それほど長い年月、欠かさずに個展を開くというのは聞いたことがありません。

萬二: 今年は九州だ、今年は関東だ、今年は関西だ、と所変われば、同じ作品を持って行っても見る人は新鮮さを感じるけれど、毎年同じ場所だと、「こ

れは昨年も見ました」と言われてしまいますよね。だから、毎年新しいものを提供するってはいけない。常にチャレンジ——挑戦する心と、クリエイト——創造する心で、難しい展覧会だけど、あえて続けているんです。

b: 常に挑戦し、創造していくために、心がけていらっしゃることはありますか？

萬二: そうした心を磨くには、やっぱり旅をすることですね。いろいろなところに行くことです。日本国内は全部の都道府県に行きました。各地方に行けば、それぞれの文化がある。例えば、地方の神社仏閣に行ったら屋根の構造を観察したり、その土地独特の建築様式を見たりするんです。記念碑があったら碑文を読み、感動した部分があったらノートに書き写して作品の糧にします。そういうものを吸収して、それが即、作品になってくるわけではないけれど、感動を受けることでインスピレーションが生まれてくることはあります。だから常に旅をするんです。

b: 旅をすることが先生のインスピレーションの源なのですね。

萬二: 明日からは富山に行きます。福岡空港から小松空港に行くのが最短だけど、ただぱっと行っただけではおもしろくないから、羽田空港まで行き、東京から北陸新幹線で富山に行けば、遠回りだけど新幹線の車窓から景色を見られるでしょう？ こんなふうに、とにかく自分自身に刺激を与えるようにしています。90歳を過ぎて「俺は歳だから」という感覚は全然ないですね。

b: 先生は年齢を全く感じさせません。むしろエネルギーにあふれています。

萬二: 「もう歳だから」と言ってしまったら、意欲も湧かないし、創造のセンスも磨かれないから、作品も枯れてしまう。ゆっくり老後をエンジョイすればいいと思う域になったら作品づくりはできないから、常に現役なんです。今でもちゃんと朝8時から夕方5時まで働いていますよ。そして、作陶ばかりではなくて営業までしないといけません。

b: 先生が一人で全部されるのは想像するだけでも大変です。営業は別のかたに頼むということはないのですか？

萬二: ええ。人に売ってもらうというのは絶対にありえない。展覧会をするときには、その会場に行って自分の作品の真髄を話さなくてはならないし、お客さんに夢を与える話術も大切ですから。

白磁という“究極の美”

b: 食器などは機械で大量生産ができますけれど、人の手によってしか作れないものもあるように思っています。

萬二: 世の中に従って合理化された製作過程も必要だから、機械が悪いということではないけれど、機械だと型を決めたら同一の型の製品しかできないでしょう？ でも手仕事だったら、丸い普通の形を少し切り落として変化を加えたり、全く違う形にしたいと思ったらすぐに変えることもできる。“手仕事の感覚”をもった人がちゃんと仕上げていけば、手仕事以上のものができるんですよ。

b: 先生ご自身の作品について伺いたいのですが、華やかな絵柄の品も多い有田焼の世界で、どうして白磁を追求されるようになったのでしょうか？

萬二: 元来、有田焼は加飾そめつけを施すものでした。加飾というのは、染付をしたり、絵を付けたりすることです。人間が自分自身をより美しく見せるためにお化粧するのと同じように。有田焼に使う石には不純物が多く、焼いたとき表面に出てきてしまうので、染付をしたり、絵を付けたりしてきたんです。なぜ私がそういう伝統的な加飾の有田焼をやらず白磁に専念することになったかという、ひたすらに修行をしたら「最高の美人を作れば加飾する必要はないんじゃないか」という域に達したからです。

b: お化粧をしなくても、美しいものは美しいということですね。

萬二: “究極の美しい形”を作れば加飾する必要はないと思ったんです。しかし、いざやってみると、10個作っても完璧なものは1個ぐらいしかできない。それではちゃんと生産できないから、窯業試験場で陶土や釉薬ゆうやくについて研究しました。また、陶土を作る工場とタイアップして「鉄分を除去した最高の陶土を作ってくれ」と頼み、良質な陶土を作ってもらえるようになったんです。自分一人



の技術だけではなくて、材質もよくないと白磁はできない。戦前はほとんど作られなかったけれど、今は若い人たちも白磁をやるようになりました。

b: とても繊細で清らかな白磁は、どのような環境で制作されているのか教えてください。

萬二: 白磁というのは一本の狂いもないように作らなきゃいけないから、ピンホール[※]が一つあってもだめなんです。そのためには作業所の環境も精密機械をつくるような環境にしないとダメです。土足厳禁ですから入り口で履物を変えなくてはいけなし、暑いからといって窓を開けて作業していたら外気のゴミが入ってきてしまう。服装も毎日新品を着る必要はないけど、洗濯してきれいなものを着る。服からゴミが入ったら大変だからね。爪一つとっても、ふと錆びた釘を拾ったときに爪の中に錆が入ったらそれで最後ですから。あらゆる点で注意しないと白磁はできないんです。

b: “究極の美”を生み出すためには、どんなものが必要だと思われますか？

萬二: 作る技術があっても創造するセンスがないといけなし、いくらセンスがあっても技術がないとできない。最高の技術と鋭いセンス、そして穏やかな心、感動する心があってこそ、その人の作品というのが生まれてくるんです。あそこに波が立ったような作品【右の写真】があるでしょう？あれも一つの美なんですけれど、四国に渡るときに鳴門の渦を見て感じた世界を表現したものです。人様の模倣をするのではなくて、自分自身が感動を受けたものが作品になっていくのです。何でも心をもってすれば、美というものが生み出される。水前寺清子さんの歌に、「ぼろは着ても こころの錦」という歌詞がありますけど（笑）いくら卓越した技術があっても、心がよくない人と長く付き合うのは難しいでしょう？ 若い人を育成する

※釉薬の表面にできる小さな穴。

にしても自分の弟子にするにしても、長く付き合いたいのは、やっぱり心がよい人です。

b: 教えるときにも「心」を大事にされているんですね。

萬二: 心というのは大きく言えば「愛」です。愛というのは国を愛する、郷土を愛する、親を愛する……今の人は愛が少ないかな。若い人たちには厳しいことも言うけれど、あるときはバス一台を貸し切って鹿児島島の薩摩焼など各地の焼き物産業を見学する研修旅行に連れていったこともあります。教え子たちに、一生懸命勉強しようという心を養わせたいと思ったからです。

b: 伸びる人の特徴などはあるのでしょうか？

萬二: ものづくりにおいては、器用な人ほど大成はしないんです。本来は、器用で人よりも非常に努力すればこれに勝るものはないけど、往々にして器用な人は努力が足りないことが多いのです。あまりにも不器用では困るけれど、器用でもない普通の人の方が人並み以上に努力すれば、必ず大成するということです。これは自分自身が身をもって感じたことです。



白磁渦文 壺



井上 萬二 (いのうえ・まんじ)

昭和4年佐賀県有田町生まれ。12代酒井田柿右衛門、初代奥川忠右衛門らに師事、白磁制作の技法を習得した。県立有田窯業試験場（現・佐賀県窯業技術センター）に勤務しながら磁器の成形、釉薬の研究を重ね、伝統的な白磁制作技法を極める。「現代の名工」労働大臣表彰、日本伝統工芸展で文部大臣賞などを受賞。平成7年には重要無形文化財「白磁」保持者に認定される。現在、日本工芸会参与、有田町名誉町民。

上野耕平の
crossing [クロッシング]

第6回

ドクターイエロー
(新幹線電気軌道総合試験車)



幸せの黄色い新幹線！

先日僕が活動したる The Rev Saxophone Quartetと九州、四国の演奏旅行に出掛けた時のことだ。移動のため山陽新幹線小倉駅のホームへ。すると「回送列車がまいります」とのアナウンスが。こんな時間に関ここを回送列車が……？ 見てみると、なんと新幹線のお医者さんと呼ばれるドクターイエローが！

なかなか出会えないこの車両。運行する日時は公表されていない。出会うには運が必要だ。真っ黄色の車体に青の帯。普通の新幹線とは違う窓の配列。そして先頭にある記録用カメラの窓がどこことなく滑稽な表情。

我々が日々安心して新幹線を利用出来るのもこの車両を使用した厳しい検査のおかげ。幸せの黄色い新幹線に感謝。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ぼんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

最新CD『アドルフに告ぐⅡ』（日本コロムビア）[3,000円＋税／COCQ-85478] が好評発売中。

〈演奏〉上野耕平（Sax.）、山中淳史（Pf.）、林英哲（太鼓）*

〈収録曲〉藤倉大『プエノ ウエノ』（初録音）*、逢坂裕『ソプラノサクソフォンとピアノのためのソナタ エクスタシス』（初録音）、デューク・リュック『ソナタ 嬰八調』、マルタン『バラード』、トマジ『バラード』

編集部メモ

ドクターイエローは、東海道新幹線と山陽新幹線の区間（東京～博多）を走る黄色の新幹線だ。

通常の新幹線とほぼ同じ速度で走行しながら、線路や架線などの電気設備に異常がないかを調べる役割をもつ。7両編成で、車内には設備確認のためのさまざまな測定機器が搭載されており、運転士と車掌のほか、複数名の技術者も乗車し、走行中はデータの収集が行われている。

近年は、一般客が車内に入ることでできるイベントが行われることもある。



One day, [ワンデー ワンモーメント] one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ

Photo・Text：Tomoko Hidaki

8 枚目

ここに近い音

小鳥がさえずっている。星屑がキラキラと流れていく。ドキドキ、胸の鼓動のようなリズムが響く。透き通った青い空気を感じたかと思えば、一転、熱く激しいビートが燃え上がる。彼女の音と共に色々な世界が心の中に広がっていく。

要塞のように組まれた多様な打楽器の中央に立ち、少年のような風貌で軽やかに身を揺らし、音の中を自由に泳ぐ。言葉でもなく、メロディーでもなく、でも一番心に近い音。その音を写真に撮るには？ 何も考えずに、感じたままに。



ヒダキトモコ

写真家。日本写真家協会・日本舞台写真家協会会員。

東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。

官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的な魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。

<https://hidaki.weebly.com>



だが、今では60人近くに増えてうれしいですね。児童合唱団で歌っていて土曜会に入ってきた人もいます。



▲鶴岡放送児童合唱団の練習風景。小学3年生から中学3年生までが在籍している

——児童合唱団には、年齢差のある子どもたちが在籍していますが、選曲はどのようにされているのでしょうか？

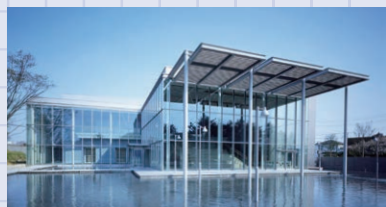
幅広い難易度の曲に取り組んでいます。大人っぽい曲は小さい子どもにとってシンパンカンパンですが、それも教育だと考えています。理屈ではなく耳で覚えてしまう時期があってもよいと思うからです。また、簡単な曲は中学生にとってはもの足りないかもしれないですが、シンブルな旋律を上手に歌うのは意外に難しいことだったりします。いろんな曲から学びを得られるよう、いちばん下の小3に合う曲といちばん上の中3に合う曲をバランスよく配合するよう心がけています。

——昨年の児童合唱団の定期演奏会では、音楽劇『泣いた赤おに』（浜田広介原作／横山裕美子作詞・作曲）を上演されましたね。赤おにを演じた中学生のお母様が「人前で歌うような子ではなかったのに、堂々と歌っていて感動した」とおっしゃっていたのが印象的でした。

子どもたちは一人一人、伸びる時期が違います。おとなしい子もいますし、体格的に大きな声が出ない子もいます。それぞれの成長過程をよく見る必要があるので、練習のときは一人ずつ、声のタイプを生かした小さい曲を歌わせます。同じ学年の子でも、そのときの上手い下手で比べません。「成長途中だから、今は無理に大きな声を出さなくていいよ」と。頑張ろうとする子ほど喉に力が入りますからね。「自分に合った声が出ているかどうかは先生がみるから、あなたは自然に歌いなさいよ」と伝えていきます。こうした個人指導は、土曜会でも同じです。

——学校の授業でも合唱団の指導でも、個人指導を大切にしてください。それが伝わってきました。

学生時代に師事した田中信昭先生がこうおっしゃっていました。「100人いたら100人のことを見続けなさい」と。ちゃんと見ていると、この人は本気になっている、冷めている、といった温度感も分かります。同じ人でも温度感はいによって違いますから、個人を見続けないと正しいサジェスチョンはできません。田中先生の言葉がきっかけで、一人



▲インタビュー会場となった鶴岡アートフォーラム。市民ギャラリーや展覧会、ワークショップなどが開かれる文化施設で、柿崎先生は教員退職後4年間、館長を務めた（©篠澤裕）

一人を見続ける指導者になろうと思ったんです。——長年の経験から得た、一人一人に向き合うためのコツがありましたら教えてください。

面と向かってはめると嘘っぽく聞こえるから、通りすがりや帰り際に「よかったよ」と声を掛けるようにしています。さりげないひと言の評価が心に残るものです。だから去り際がチャンス。保護者の中にも、帰り際に話しかけてくるかたがいますけれど、何か聞いてほしいことがあるんですよ。そうしたチャンスを逃さないようにしています。学校でも、何か今日は様子が違うなと感じる子がいたら、帰り際に声を掛けてみてください。さりげないやりとりが、実は大切なことです。



▲鶴岡土曜会混声合唱団。昨年11月の全日本合唱コンクール全国大会で金賞を受賞した（©さとう写真企画）

教育百景

おしえ・そだてるといふ

学校とは異なる環境で、教育活動を行っている先生を紹介する本連載の第3回は、山形県鶴岡市で、合唱指揮者として活躍されている柿崎泰裕先生にお話を伺いました。

第3回

柿崎泰裕先生
かきざきやすひる



柿崎泰裕
鶴岡放送児童合唱団
指揮・指導者
鶴岡土曜会混声合唱団
常任指揮者

同じ人間として生徒に向き合う

——先生のご出身はどちらですか？ また、合唱との出会いについて教えてください。

鶴岡で生まれ育ち、大学は東京へ行きました。一般の大学へ通い、それから音楽大学に入り直したため、計8年間を東京で過ごしています。最初の大学で合唱団の学生指揮者になり、田中信昭先生（現・東京混声合唱団桂冠指揮者）に教える機会がありました。私は当時20歳、田中先生は40代でバリバリの指揮者。レッスンに行くとき緊張で身震いしたほどです。こうした縁がきっかけで、音楽大学で勉強したいという気持ちになり、音楽科の試験を受けたんです。音楽大学でも2つの合唱団を立ち上げて、それぞれで宗教音楽と室内オペラを指揮しました。

——東京で合唱指揮をみっちり経験されて地元に戻られたのですね。

はい。地元には教員として戻ってきました。管理職も含め通算で34年間教員をしたことになりました。いばん長くいた中学校は、着任当時、ずいぶんと荒れていたんです。生徒たちが言うことを聞かない、授業をサボる、警察に補導されることも……。私は、音楽を通して生徒たちの心の荒れを鎮めることはできないかと考えました。

——音楽で、どのように生徒たちの心をケアされたのですか？

荒れている生徒は「どうせ俺なんか」と思っていることが多いので、具体的に名指しでほめるようにすると存在感が出てきます。授業では、歌いながら指揮をするという活動を全員にさせるのですが、歌と手が合っているセンスがあるなと思ったら「指揮をやった

みる？」と聞いて皆の前で振らせてみるんです。そうして自分の存在が認められると、だんだんやる気が出てきます。また、男子は一人ずつ呼んで個人指導もしました。音程が合っている子は自信をもつし、間違っている子は何が違うのか気付くことができます。正しい音程が取れたときは心からほめる。どんな生徒にもチャンスを与えるようにすると、「あの先生は決めつけないでちゃんと見てくれる」と感じるようになります。

——生徒も先生のことをよく見ているのですね。

ある生徒がこんな質問をしてきたんです。「ごまかしてばかりの頭のいいやつと、ごまかさずに暴れる俺、どっちが人間としていいのか？」と。私はどっちもダメだと言いました。ごまかすのもよくないけれど、正直に暴れるのもダメだと。でも、「人間としては正直なほうが好きだ」と伝えました。暴れて壁をたたくような生徒は、言葉でうまく説明できないから、ごまかすこともできないんですよ。「ちゃんと暴れる理由を聞くと」と、同じ人間として対等に話をする姿勢を見せることが大切だと思います。

合唱指導をライフワークとして

——教員をしながら、2つの合唱団の指導を続けてこられたと伺いました。

地元に戻ってきて1年ぐらいたったとき、「鶴岡放送児童合唱団」から「練習に来てくれないか」と声が掛かり今に至ります。30年ほど前は90人近く団員がいましたが、少子化の影響もあり、今は30人弱です。人数は少ないですが、小学3年生から中学3年生まで幅広い学年が在籍しています。それと並行して、大人の合唱団である「鶴岡土曜会混声合唱団」でも指揮者を務めてきました。私自身も高校生のときに在籍していた思い出深い合唱団です。こちらは、昔20人ちょっとでし

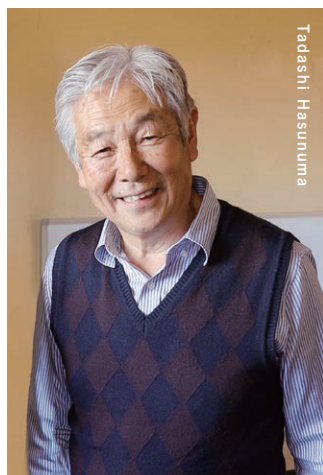


[ワールドレポート]

World Report

南アフリカの子どもに、移動図書館車を

世界各地に赴任したビジネスマンが、第二の人生を教育にささげる理由



Tadashi Hasunuma

南アフリカで暮らす蓮沼忠^{はすぬまただし}さんは、かつては日本の電化製品を海外で販売するため、世界を舞台に活躍してこられました。企業人として多くの国々で働いた蓮沼さんが、退職後に住む場所として選んだのが南アフリカ。同国の初等教育支援のため、現地でNPO法人SAPESI^{サページ} [South African Primary Education Support Initiative] を立ち上げます。日本各地の自治体から譲り受けた中古の移動図書館車をメンテナンスして南アフリカへ届け、現地で学校の巡回図書活動を始めました。

この活動はやがて作曲家・弓削田健介^{ゆげ たけんすけ}さんの心を動かします。前号のレポートでご紹介した“図書館で会いましょう”プロジェクト*は、蓮沼さんと弓削田さんの出会いなしに語れないものです。

蓮沼さんを駆り立ててきた思いとは——？ 2019年9月、作曲家の弓削田さんと教育芸術社の編集部員による南アフリカ訪問で実現したインタビューをお届けします。

蓮沼 忠（はすぬま・ただし）

1971年、ソニー株式会社に入社。以後33年にわたり、中東地域をはじめ、スペイン、中国、香港、そして南アフリカにおける電化製品の販売事業に携わる。1998年にはソニー南アフリカの社長に就任。ネルソン・マンデラ元大統領と知己を得る。ソニー退職後も南アフリカに在住し、NPO法人SAPESI（南アフリカ初等教育支援の会）を設立。現地の教育水準向上を目標に、読書を通じて子どもたちの識字率を改善する活動に取り組んでいる。

* 弓削田健介さんの作品集『図書館で会いましょう』から生まれたプロジェクト。南アフリカの子どもたちに「移動図書館車」と「歌」を届けるという2本の柱で構成されています。2017年にスタートして以来、作品集の収益による図書館車の寄贈が実現、そして作品集のテーマソングである『図書館で会いましょう』の英語版を制作するなどの活動を行ってきました。



弓削田健介作品集『図書館で会いましょう』（教育芸術社）
読書の楽しさを伝えたいという弓削田さんの思いでつくられた、
図書館や本をテーマにした歌の数々が収められています。





移動図書館の前で現地の先生がたと（前列左が蓮沼さん）

世界を渡り歩いた熱血商人

——海外でお仕事されるきっかけには、どのようなことがあったのでしょうか？

蓮沼 忠（以下、蓮沼）：私が働き始めた1967（昭和42）年頃の日本は、今と比べてずいぶんと貧しかったんですね。大卒男子の初任給は3万円を超えるくらいだったかなあ。1ドルが360円の時代です。若かった当時、海外、特に欧米の暮らしはとても豊かに見えました。それで海外に出て働いてみたいと強く思ったことが、理由として大きかったですね。

——そして大手電機メーカーに就職されました。

蓮沼：海外勤務を募集していたソニーに中途入社しました。最初の赴任地はドバイ。中東地域におけるテレビやオーディオ製品といった家電類の販売網づくりが目的でした。日本でも社会問題となったオイルショックの頃で、赴任先の産油国には大量の外貨が流入して、この地域が強くなっていく見通しがあったんですね。それでペルシャ湾の拠点としてドバイが選ばれ、周辺地域を開拓していくことになった。ドバイは今と違って漁村のような雰囲気もあってね、現地の日本人駐在員は十数人ほどでした。ペルシャ湾岸の国や地域の営業活動を展開していく中で、最終的には大きな市場としてイランとサウジアラビアが重要だ、ということが分かってきました。



ソニー時代の蓮沼さん



ソニー・スペインの同僚たちと（後列右から2番目が蓮沼さん）

——ドバイでのスタートから、長く海外勤務が続きます。

蓮沼：中東をはじめ、スペイン、中国、香港、そして南アフリカ。——私の人生は、日本の企業のために常に海外で仕事をしてきた、ということになります。ドバイでの赴任後、イランに新しい事務所を開くために、テヘランに移りました。代理店の主人はユダヤ人で、いろいろ大変なことはありましたが、自分が頑張れば頑張ったなりの成果が得られ、仕事のやりがいがありました。結果が数字に表れて、販売体制が拡大していったのはうれしかったですね。イスラムという異文化に直接触れることができたのも貴重な経験でした。サウジアラビアでは、戒律を破った罪人の公開処刑場を目の当たりにしたこともありました。イラン革命後の、イラン・イラク戦争をちょうど現地で体感したことが最大の出来事ともいえます。商品を収納した倉庫の近くを爆撃機が飛び交い、ミサイルが降ってきたときは、会社の仲間と夜を徹して荷物を移動させました。平和な日本では経験できないことですよね（笑）。

そんな中、いくら何でも戦地にいるのはまずいということで本社から通達があり、ひとまず日本に帰国することになりました。

教育の道へ——南アフリカの未来のために

——海外で実績を上げ続けた熱血ビジネスマンの蓮沼さんが、教育について関心をもったきっかけは、何だったのでしょうか？

蓮沼：イランから帰国したあとはスペインや中国で働き、新しい市場として、次はアフリカだ！ということになったんです。新天地のアフリカで販売体制をつくるために、南アフリカに子会社を設立しました。それで、現地で従業員を雇うための採用試験をしたとき、とてもショックを受けてしまって……。それは、現地の人たちの中には文字の読み書きができない人が多くいる、ということなんです。成人の識字率が低い。銀行に行っても名前も書けないようでは、とても採用できません。アパルトヘイトの弊害、この国の抱える矛盾みたいなものに直面しました。その時点で、「社会活動をしないと企業として認められない」という意識を各国での仕事から学んでいましたので、何かできることはないかな、と思うようになりました。まず実行できたことは、テレビでの教育番組放映に関する支援。仕事柄、機材の販売を通じて国営放送局との付き合いがあったので、朝のワイドショー後に休止していた時間帯で学校向けの放送をしてはどうかと提案し、番組制作のサポートをしました。

——実際に現地の学校を訪問されることもありましたか？

蓮沼：あるとき、南アフリカの田舎の学校に行つてね……。教室は殺風景だし、本がないことが強く印象に残ったんです。本を読む習慣というものがないんだなあ、とあらためて実感しました。この国で繰り返されてきたのは、語り部から聞いた物語を正確に覚えて伝える、ということなんです。読解力を育てるのではなく、覚えることが目的。日本でいう「読み書きそろばん」のような初等教育の基礎的なバランスがないんですね。特に、言語教育不備の改善は喫緊の課題だと感じました。



講話を通して子どもたちに読書の楽しさを伝える

——教育への関心が、NPOの設立にまでつながっていきます。

蓮沼：何とかしなければと思い巡らせていたとき、高校時代のラグビー部の先輩が、南アフリカに訪ねてきたんです。その頃はもう、私もベテランの域に達していましたが、教師となっていた先輩に再会すると、高校1年生のときの3年生であった当時の上下関係にすぐさま戻りました。先輩は「蓮沼、商売ばかりに精を出していたらいかんぞ」と笑いながら切り出し、興味深い話を聞かせてくれました。それは「中古になった移動図書館車を南アフリカに送っている知り合いがいるのだが、受け入れ先が不透明で、車が行方不明になることもある。個人での活動には限界がある」という内容でした。私は「これだっ!」と思いました。これでこの国の人たちに本が届けられる、読み書きの能力向上の手伝いができる、と。移動図書館車を受け入れるNPOを設立して、仕事を定年退職してもこの国のために生きよう、という考えが浮かびました。

南アフリカの風を感じながら



——当時のネルソン・マンデラ大統領とも個人的にお会いしたと伺いました。

蓮沼：お目にかかれたのには、おもしろいきっかけがあつてね。大統領のお孫さんが、あるとき「おじいちゃん、願い事は何でもかなえられるんだよね」と言ったんだそうです。お孫さんの願い事とは、その頃に発売されたソニーのあるゲーム機が欲しい、どうにかして手に入れられないか、ということだった。世界各地で販売していましたが、南アフリカには、当時、購入ルートがなかったんです。あるとき、大使館の人に呼ばれて「なんとかできないか」と（笑）。それで日本から取り寄せて、後日大統領に直接届けました。とても喜んでくれましたね。南アフリカのために闘った英雄も、お孫さんにとっては、不可能を可能にするおじいさんであつたわけです（笑）。

——南アフリカの魅力とは、どんなところにありますか？

蓮沼：マンデラ大統領がまさにそうでしたが、新しい民主主義をつくることに燃えていたし、教育が国をよくする、という信念をもつ人が多いところはすばらしかった。成人識字率を向上させるためのプロジェクトに加わったこともあったように、国をよくしていきたいという情熱には心を打たれましたね。アパルトヘイトの名残でまだまだ貧困や格差、社会の矛盾はあるけれど、なんともいえない魅力があります。人々は皆、基本的に人生に楽観的でおおらか。それとこの大自然。アフリカの風に吹かれて、ここはアフリカなんだ、アフリカ流でいこう、と私もこちらでの生活を楽しんでいます。

音楽とのコラボレーション

——SAPESIの活動を通して弓削田健介さんと出会われ、移動図書館車と歌のコラボレーションも始まったのですね。

蓮沼：そうですね。正確に言えば、移動図書館車を製造する会社の人が、弓削田さんに私の活動について話をしたらいいんです。全国図書館大会だったのかな。それで弓削田さんがSAPESIの活動に興味をもってくれて、日本で活動するメンバーが間に入り、用事があって一時帰国したときにお会いしました。私とは親子ほど年の違いはありますが、同志のように感じる存在です。ご自身のつくった歌と我々の活動を結び付けてくれたこと。出版された曲集の収益をチャリティーにして、移動図書館車を寄贈してくれたこと。こうしてはるばる南アフリカまでやってきて、本を読むすばらしさを伝える歌を南アフリカの子どもたちと一緒に歌ってくれたことには、感謝しかありません。この国の子どもたちは、ダンスと歌がとても好きで、そしてものすごく上手なんです。そう感じませんでしたか？

——すばらしい歌声と、リズム感です。蓮沼さんにとって音楽とはどのようなものですか？

蓮沼：もちろん音楽は大好きです。イランのあとに赴任したスペインでは、仕事上でも音楽との関わりがあって、忘れがたい思い出もあります。スペインでは業績がよくて、現地の人たちからの評価もありました。そうなってくると、商売だけではなく社会貢献によっても存在感を示さなければなりません。産業界、財界とも付き合いが生まれ、ソフィア王妃高等音楽院の設立に携わり、ソニーはチェロ科をスポンサーしました。名誉客員教授は20世紀の巨匠、ロストロポーヴィチ氏！ 温厚そうな方でしたよ。また、ヴァイオリニストの五嶋みどりさんを招いてプライベートなサロンコンサートを開いたこともありました。1992年、バルセロナ・オリンピックでのことです。本社がバルセロナにあるソニー・スペインは、オリンピックに全面協力の体制で臨み、技術部長や経理課長を外向させたり、メインスタジアムにジャンボトロン（大型映像表示装置）を設置・寄贈したりしました。そのような関係で開会式の会場にいましたが、クイーンのフレディ・マーキュリーがつくった『バルセロナ』という曲を、スペインの国民的オペラ歌手、モンセラート・カバリエが歌っていて、これにはしびれましたね。すばらしかったなあ！

——企業の第一線で活躍されてきた立場から、音楽や芸術はどのようなものですか？

蓮沼：利益を第一に優先する、ということに長く関わってきましたが、私がビジネスの世界で出会ってすばらしかった人たちは皆、音楽や芸術に造詣が深かったと断言できます。芸術に親しむ人には人としての奥行きがある、というのかな。そういったものが感じられます。音楽が全人教育に深い影響を与えることは、自分の経験からも間違いないことです。



子どもたちと歌う蓮沼さんと作曲家の弓削田健介さん



移動図書館車が活躍する様子を動画でご覧いただけます。
現地の子どもの歌やダンスもお楽しみください。

https://www.kyogei.co.jp/library_project/

（取材・構成：ブーケ編集部）

- 02 [特別企画/Interview] 井上萬二〈重要無形文化財「白磁」保持者〉～有田焼の巨匠が語る
- 07 [連載] crossing 第6回 上野耕平
- 08 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 8 枚目 ヒダキトモコ
- 10 [連載] 教育百景 おしえ・そだてる日々 第3回 柿崎泰裕
- 12 [連載] World Report vol.7 南アフリカの子どもに、移動図書館車を



<https://www.kyogei.co.jp/>

編集後記

『bouquet(ブーケ)』No.8をご清覧いただき、ありがとうございます。

今号、特別企画としてご紹介するのは、人間国宝に認定された有田焼の巨匠、井上萬二先生のインタビュー記事です。

窯元の煙突が伸びる風情ある町の、緑豊かな高台にたたずむ工房「井上萬二窯」を訪れました。

ここには職人さんたちの作業場、窯、展示場など、「白磁」のための全てがそろっています。

萬二先生のこれまでの人生や、追い求める「究極の美」のことなど、さまざまに語っていただきました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全てのかたに、心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 松田剛(quia)、中澤美羽
写真(中面インタビュー): 保利一誠、井上萬二窯 / DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷 / 製本: ヤマナカ製本